

やぶなべ会報

自然を見つめる「やぶなべ会」(青森)発行

誌 名	やぶなべ会報
号/発行年/頁	27 / 2010 / 64-65
タイトル	グダリ沼のプラナリア
著 者 名	平山香代

自然を見つめる やぶなべ会 (青森)

グダリ沼のプラナリア

第36代 平山香代

グダリ沼…ああ、なんて清らかで涼しげな響きでしょう。→やぶなべ会員

グダリ沼…「ワイハ、ナンボ、ゲジャゲジャ シテランダー!」→ 一般的津軽衆

25年前でおぼろげとなっていた「グダリ沼」のプラナリアの記憶。一か月前の小山内先生との自宅前路上での再会。その2～3分の会話で、グダリ沼の価値を初めて知ったのだった。傍らでは4歳の双子の息子がちょろちょろ。他に7歳の双子もいる子育て真最中。「しかし、グダリ沼のプラナリアのためならば書がねばマイネの!」

当時の調査状況は、学校を出発するのは午前授業の午後、高体連の応援をさぼり、夏休み合宿時。先生の車か50ccバイクにタンデム(もう時効でしょう)。プラナリア班2～3人の他、昆虫班、植物班2～3人も調査に協力してくれる。

到着するとそこは当時牧場地内、白衣で身を固めた怪しい高校生集団に牛たちがモーモー言いながら集まってくる。牛に囲まれ身動きできないこともあったっけ。

凹地のグダリ沼にたどり着くと、一面に美味しいオランダガラシ(クレソン)、花の可憐なバイカモが広がっている。帰りにバケツ一杯のクレソン拝借。

白衣の足元は長靴、手には水彩画用の筆と言う出で立ち。水底からぼこぼこと湧いてくる冷たい清水にそうっと足を入れる。夏場でも水温6～8℃で、今の自分の体では耐えられない。当時は身体が発熱していたのか、2時間も冷水に浸かっていても素手でもへいつちやら、足もぼかぼか(今や発熱する下着を愛用中であるのに)。

約50cm四方を自分の感覚で決める。底の石を一つずつ水の中から拾い上げて裏返す。

プラナリアを同定(識別)する。体長を測る。どうやって体長を測ったんだろう…定規かな? 忘れた。そして水底にプラナリア付きの石を戻す。記録する。――この作業を繰り返すのだ。

そして左右どちらかに水平移動する。また約50cm四方の枠…はい移動…。くらくらしてくる。火山性の白黒の石を見続けているせいもあるか? それにしても、ウジャウジャいる。まさに「プラナリア天国」。プラナリアの種の中でもキタシロカズメウズムシとカズメウズムシだらけ。冷水を好むキタシロカズメウズムシとカズメウズムシならでは。この2種は6月～8月と気温が上がるにつれ、次第に小型化していくのだ。

比較…1982～1983(昭和57～58) vs. 昭和61.やぶなべ30号、山道香さんの調査報告との比較をする。第1印象は、これほど減っているのか――との驚きである。減っているにしも、他種に比べれば最も多いのがカズメウズムシであることに変わりはない。キタシロカズメウズムシが若干ながらも存続し続けているとは、さすが、清流グダリ沼「プラナリア天国」。ナミウズムシが消え、イズミオウズムシが増えた原因は、小山内先生の市誌の考察通りだろう。牧場で牛の放牧が無くなり、糞尿の流入が無くなったなどのためとのことである。



茜ちゃん(7歳)が描いたプラナリア

現在、私は子育てしながら市民レベルでのマラソンをしている。週に一度、駒込川沿いの八甲田・田代平サイクリングロードをトレーニングに走っている。今は渡り途中のカモ類(マガモ、コガモ、キンクロハジロ、スズガモ)の群れが川面に休む。見上げるとオオハクチョウの家族が「カウ、カウ」と鳴き交わしながら飛ぶ。この流れの源流こそ、グダリ沼なのだ。この流れを愛でながらのランニングは、それはそれは気持ちがいい。昔も今もーグダリ沼よ、どうもありがとう。

付録

当時、グダリ沼と並行して、野内川など市内のプラナリアの調査を行っていた。野内川は私の実家のある地でもあるため記憶がある。

折しも、みちのく有料道路が野内川に沿うように建設され、その工事の影響が見られた。折紙橋より上流で野内川に流れ込む3本の支流の調査だった。グダリ沼と同様、調査は、1回しゃがんで約50 cm 四方の流れの中の石を一つずつ裏返し同定していくもの、ただ、斜度のある急流が多く、拾い上げた石を元の流れの中に戻すとプラナリアが流されて行ってしまう事件が度々あった。みちのく有料道路から排出される土砂、コンクリートなどで水質が変わっていく。私の関わった2～3年でもプラナリアがぐんぐん減っていったことを覚えている。野内川ではミヤマウズムシが多かった。他の市内の調査地点では、どこでもいわゆる教科書に載っているプラナリアのナミウズムシが見られていた。